

第 87 話(67 頁) お百姓と斧

お百姓がふと見ると、丸太が川を流れていきます。お百姓は、斧をつかって、岸から丸太を手に入れようとしてました。斧を丸太にひっかけたのですが、手からはなれてしまいました。斧の柄をつかもうと追いかけてましたが、斧は行ってしまいました。

「結びの言葉がとても印象的だよ。あーあ、大事な斧が流れて行っちゃった…と、お百姓の溜息が聞こえてきそうさ。」

「失くしてみても、初めてその価値が身に染みて分かった、という喪失感。こういうちょっとした失敗って、だれでも経験している。」

「川を流れて行く丸太を見て、お百姓はどうしても手に入れたくなかったのだろうか。」

「しかし、丸太ってそんなに大事なものだっただけかな？」

「うーん、確かに。乾かしてから、せいぜい持っていた斧で割って薪にするぐらいだろうよ。」

「だったら、斧が流される危険まで冒す必要はもともとなかった…」

「川の丸太を見て、とっさに後先を考えずに斧を振り上げてしまった。」

「そうしたら、思ったより川の流れは速いし、丸太は重かった。」

「それで丸太に斧を引っかけたまま、自分の手を離さざるを得なかった。魔が差したというか、たかをくくってやってみたのか…」

「イソップ物語に『金の斧』という有名な話があって、それを思い出しちゃった。きこりが川に斧を落として困っていたら、ヘルメス神が金の斧や銀の斧を拾ってきたが、自分の斧ではないと首を振る。鉄の斧を拾ってきたときに初めて領いたきこりの正直さにヘルメス神が感心して金の斧も銀の斧も3本全部を与えたという。」

「水の中で斧を失う点は共通している。トルストイはイソップを全部読んだのだから、この話も当然知っていた。それで、ひょっとして参考にしたのか。」

「そんなことはないのでは。話の筋も全然違うし、それより、本当にあった話が基になっているのかもしれない。」

「そっちの見方に賛成するよ。前にも出たけど、身近にありそうなことだからね。」

「とてもリアルで臨場感があるのは、そのせいだろうか。」